

## 「神が味方なら」

ローマの信徒への手紙 第8章 31節～39節

説教 本庄侑子伝道師

私たちは今朝、《神が味方である》という事実を耳にしています。その理由はただ一つ。神がお見せになりたかったからです。神が私たちの味方であるために何をしてくださったか、今何をしてくださっているか、そしてこれから何をしてくださるのか。それらの事実を語り聞かせ、私たちがそれを信じ、それだけを見つめて、神に味方されている姿で歩み出すためです。

今日の聖書箇所語り手であるパウロは、人の目には「神に味方されている」と思えない人生を歩きました。「艱難。苦しみ。迫害。飢え。裸。危険。剣。」(35節)いずれも、パウロ自身が経験した事実です。神が味方ならこれらから守られるのではないのか、と思いたくなります。しかしパウロは、神に味方されている中で、これらを全て経験しました。さらには、《最も暗い絶望的な詩編》と評される箇所を引用し(36節、詩編44編23節より引用)、この世界で、しかも神を信じる者たちによって叫ばれた、最も暗い絶望的な叫びをも巻き込んで語ります。

「しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。」(37節) 艱難や苦しみを取り除かれて初めて、輝かしい勝利を収めるわけではありません。ふりかかってくる艱難や苦しみの現実があり、この世界で叫ばれた最も暗い絶望的な叫びがある、「しかし、これらすべてのことにおいて」「輝かしい勝利を収めている」のです。

さらにパウロは「わたしたちは」と言って、私たちのことをも巻き込みます。聖書を読み始めると、ずっとふたをしていた、でも本当は誰かに聞いてほしかった、そんな心の奥底の叫びを聞き上げようとする言葉に出会います。教会の礼拝において、聖書の言葉を通して、生ける神に触れられ、揺さぶられます。このパウロの言葉もそうです。私たちの本当の姿を見透かすかのようにして、「わたしたちは」と踏み込んで語りかけてきます。

なぜならそこには、「わたしたちを愛してくださる方」がおられるからです。艱難や苦しみに縛り付けられ、人知れず絶望の叫びを叫んでいる場所、たった独りだと思っていた場所にまでイエス・キリストが踏み込んでこられたからです。神がその場所でこそあなたの味方であるために踏み込んでこられた、という重大な事実が

あるからです。

神が人となり、この地上を歩いて、私たちがこの世界で味わうあらゆる艱難、苦しみにその足で踏み込み、その体で痛みを、その心で悲しみを味わわれました。そして、この世界で叫ばれる最も暗い絶望的な叫びをも呑み込むようにして、究極の絶望の叫びを、その口で完全に叫びきって死んでくださいました。もうあなたはこのような叫びを叫ばなくてよい。私が代わりに叫びきって死に、よみがえり、新しい命の中にあなたを招いたから。もうふたをしなくてよい。そこから出てきなさい。あなたは自由に生きてよい。絶望の叫びを踏み越えた新しい姿で生きてよい。そう告げるために。

「死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。」(34節)この「執り成し」を《愛の架け橋》と言い換える人がいます。私たちが味わう絶望を踏み越えて勝利し、天の父のもとにお帰りになった方が、今も、私たちのために橋をかけてくださっています。この架け橋によって、絶望の中にあっても、私たちは今、輝かしい勝利を収め続けているのです。この勝利は、あらゆる範囲に及びます(38節)。キリストは、死と死の向こう側にまで踏み込んでよみがえられました。生きていたときも、死んでからも、どこにおいても、キリストによってかけられた愛の架け橋が及ばない所はどこにもありません。

私たちも今ここで、それぞれに誰にも話せない、あらゆる苦難の現実をひきずる中であって、絶望を踏み越えた希望の光を浴びています。キリストは、天に私たちのための場所を用意して、やがて再び地上に来られます。その日まで、私たちはこのお方から、希望を抱いて生きる力を注がれ続けます。洗礼を受けた者に約束されているキリストの霊の力により、内から内から、生きる意欲と愛する勇気がわいてきます。どこにいても、何が起きてても、私たちの目に映るのは、絶望を踏み越えて希望を与える主イエス・キリストのお姿です。私たちは独りではありません。神が味方です。

「わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」(39節)

(記 本庄侑子)